宣傳ビラと云ふ騒ぎがしきりに起り、その度びに當局の主義者狩りが盛んに行はれる。

『泰山鳴動して鼠一匹』と言ふ言葉がある。而も當局の主義者狩りは泰山鳴動して鼠さへも出ない事が多かつた。これは當局が不手際だからでも何でもない。近頃の社會主義者は恐ろしく悧巧になつて、却々容易に尻尾を摑へられないからである。彼等は法律に觸れない程度で、若し觸れても二三ヶ月位の懲役で濟むやうな所で、巧妙に世間を騒がし何も知らぬヨタ新聞記者共に大見出しの記事を書かして上品に言へば宣傳、其實は賣名を計り、延いて、多少の運動費則生活費でも打出さうと云ふ新らしい戰術を生み出して來た。從つて、騒ぎだけは何時も大袈裟だが、イザとなると少しも鼠が出て來ないのである。

これにはさすがの當局も、すつかり手古摺つて了つたらしい。そこで從來の法令では何うにもする事の出來なかつた空騒ぎを取締る爲めに、新らしい法令を起草し、早晩發布する運びにしてゐるといふ事である。

此二三年來は、社會主義思想が著しく勃興して來たので、いかゞはしい社會主義者が、雨後の筍のやうに出たと共に隨分無反省な運動者も現はれた。賣名狂でさへあれば、誰でも社會主義者になれると言ふ有樣である。この傾向は當局にとつて迷惑千萬なのは勿論の事ながら、眞面目な世間にとつても迷惑な事一と方でない。それと言ふのも法令が緩慢で、何等の犧牲なしに騒ぎ廻る事が出來るのと無智な新聞記者が矢鱈に大提灯を持つからだ。

今度新法令が出る事によつて、助かるのは獨り當局計りではない。愚にも付かない騒ぎに新聞を埋められる讀者も大助かりになる譯である。取締はどん〳〵嚴重にやるがいゝ。そして無反省な賣名者を一掃するが好い。それは社會運動そのものを廓清する爲めにもいゝ事なのだ。

學者の箝口令

學者の言論が次第に過激になつて來たといふので、當局者は近く何等かの形式で、直轄學校の教授連に對して言論の取締りを行ふさうだ。政府の取締りで學者の言論を穩やかにしようなどとは飛んでもない話だ――とでも嘲笑したい所であるが、事實に於いて日本の教授連は政府の目色を氣遣ひ乍ら、その言論の手加減をして行くのだから、此取締も社會主義者の取締令同樣、寔に機宜に適したものであると言ふの外はない。

學問の獨立、研究の自由などと云ふ事は云ふだけ野暮である。言論の取締が一般に嚴重であり、社會主義思想が異端視されてゐる時代には、全く鳴りを潜めて穩和な學者であるかに見せかけてゐた人々が、一朝社會の風潮が變り、言論取締は緩慢となり、社會主義思想が歡迎されて來ると共に、相爭つて社會主義說の研究に耽るやうになつた。一時は社會主義者と言へば悉く教授學者であるかの如き觀を呈した。それが近頃讀書界の人氣は漸く社會主義から離れ、取締も次第に峻嚴に行はれるやうになつて來ると、何れも亦申合はせたやうに退いて行く有樣である。

政府の官吏である教授連にとつて、これも亦無理のない事ではあらうが、若し抑ゆる事の出來ぬ研究慾が伴ふならば、其地位と名譽とを捨てゝも、志す研究に沒頭する人もあらう。かくの如き人の現はれて來ない以上、教授連の研究が左程獻身的なものとは考へられぬ。取締を嚴重に行ふならば、一般讀書界は無責任な學者の言論に惱まされる憂もなく、また森戸事件に連坐した大内兵衛氏の如く、百方運動して再び帝大に舞ひ戻る悲慘な犧牲者も出さずに濟むのである。取締が緩慢なればこそ此種の弊害も生れやうが、嚴重な箝口令を下される事は、何人の

爲めにも禍となるものでない。それは全く一舉兩得である。

農業勞働者の擡頭

農村に於ける地主と小作人の關係はこれまで睦しい主從の感情に結ばれてゐると思はれてゐた。處が近頃になつて、農村の紛爭は頻々として行はれ、小作勞働者は次第に階級的團結を結ぶやうになり、小規模の小作組合は至る所に作られるやうになつて來た。十二月の初めには、府下府中町附近の小作人が、約八百人の大組合を作り、盛んなる發會式を擧げたさうである。

農村は從來その經濟的發達が極めて遲れてゐた。耕地は多數の地主に分割され小作人と地主との間には、昔ながらの主從的感情が僅かながらも流れてゐた。從つて同一の地主に對し、同一の勞働條件を以つて働いてゐる小作人の數は極めて少數であつた。彼等はその勞働の上に於いて極めて孤立的であつた。彼等は共通の階級的利害を感ずる事が極めて稀れであつた。それ故、農村の勞働運動は都市勞働者の勞働運動に比べて、著しく遲れてゐたのである。

然し乍ら資本主義の進行は、農村だけを置き去りにして行く筈はない。農業も次第に資本主義化して來た。土地は漸次に集中され、從つて中農階級は小作勞働者の位置に追ひおとされた。同一の地主に屬し、同一の勞働條件で働く小作人の數は次第に殖え、小作人と地主との關係は一切の主從的色彩を失つて年貢の授受、搾取と被搾取の關係のみに支配される事となつて了つた。

かくして農業勞働者の間にも次第に階級的感情が芽ぐんで來た。頻々たる農村の紛爭は斯くの如くにして起るに至つたのである。地主階級に對して、階級的利害に基く鬪爭を繰返してゐる中に、彼等は鞏固な階級團結を作り上げる事が、其

戰鬪に甚だ有利なる事を覺つて來た。小作組合の設立が至る所に試みられるに至つたのは、卽ち此理由に依るのである。

日本の小作農は、實に勞働階級の大部分を占めてゐる。從つて勞働階級の歷史的使命を果す爲めには、必ず此小作勞働者が奮起し來らねばならぬ。而も今や小作人階級は次第に勃頭して來た。吾々は絕大の興味を以つて、此傾向の進路を眺めずにはゐられないのである。

處女の貞操

例の婦人矯風會では、今度の議會に處女貞操法案なるものを提出するさうである。これは處女を脅迫、僞罔して情慾の相手たらしめる事を嚴重に取締ることを目的とするもので、島田三郎君等がその通過に盡力する筈だと言ふ。

『日本人は此問題に就て鈍感だから斯かる法律を作るにも骨が折れる』とは贊成者たる島田君の痛歎であるが、骨の折れるのは果して案の通過丈であらうか。處女の貞操保護は勿論結構な事だらうが、一體何うして取締るつもりであらう。處女を『僞罔』して貞操を賣らしめるものは、誘拐者や周旋業者や淫賣屋の亭主計りではない筈である。女の多くが金に『僞罔』されて動いて行く今日、男の多くが金で『僞罔』して女を得て行く今日、お目出度い基督敎徒諸君は、何と何とを取締る心算だらう。惡周旋屋を取締らねばならぬなら、紳士紳商の大部分も、時にはまた矯風會邊のパトロンも、一層嚴重に取締らねばならぬ筈である。飲食店や遊戲場に集る女に、處女が果してどれだけあらう。處女の貞操は、飲食店や遊戲場を取締つた所で到底保護される筈はない。

問題は法案の制定だけではない。何うして斯う云ふ法案を嚴重に行ふかと言ふ

所にある。基督教徒の清潔がりを嘲笑して見た所で仕方のない話だが、出來もしない事を騒ぎ廻つて得意になつてゐる、煙のやうな僞善だけは止めろと言ひ度くなる。

模型市場

農商務省が肝煎りの世帶の會では、會員に實際市場の有樣を知らせ、その利用法を學ばしめる爲めに、十二月の一日から世帶の會展覽會を開いた。陳列された日用品は、何れも市中の相場より安いと言ふ事を、會の當事者は自慢にしてゐるさうだが、利潤を見ない商賣なのだから、多少低廉な事に不思議はない。かう云ふ模型市場で、幾分低廉な貨物を提供した所で、實際市場の物價は何の影響も受けるものでない。

多數の市民の世帶は、模型市場で市場の利用法を學ばねばならぬやうな悠長なものでもなければ、わざ〳〵農商務省まで買ひ物に出掛けられる程氣永なものでもない。多數の世帶を樂にする爲めには、もつと手應へのある物價引下げ策を講じて貰ひ度いものである。凄まじい元氣で始められた世帶の會も、今の所では上流婦人の飯事遊びに過ぎないやうだ。此世智辛い世の中に、市場の利用法を知らぬ婦人があらうとは全く世は樣々である。

消費難

農商務省の陳列館で、世帶の會の婦人連が市場の利用法を研究してゐる一面に

は、目前の消費難に惱まされてゐる國民が澤山ゐる。

これもその一例であらう。兵庫縣西の宮から政府の物價政策を極端に批難し、『若し此上物價引下げ策を講じなければ云々』と云ふ脅迫狀を、高橋首相の官邸へ送りつけた犯人があつた。

脅迫狀とは甚だ不穩當であるが、斯う云ふ現象の表はれる事を見ても、今日の物價が平常であるとは言ひ得ない。只さへ不景氣な折からを、依然として物價の騰貴が續いてゐては、多數下層國民の生活は絶えず脅かされてゐなければならないのである。暴利取締奸商征伐の聲は一時盛に擧げられたやうだが、今に尙その効果は現はれて來ない。農商務省あたりは愚にも付かぬ世帶の會などの後押しをしてゐるより、徹底した市場取締法案でも制定するがいゝ。現在のやうな狀態に放任して置く事は、さらでだに險惡な社會の空氣を、一層惡化せしむるものでなくて何であらう。

哲學者の情死

野村隈畔と云ふ哲學者がその戀し合つてゐる若い女と情死した。その事は市井の一些事として問題にするにも當らない程の事であるが、滑稽なのは彼れの友人なる石田友治、小川未明等の諸君である。彼等は隈畔の情死を『匹夫匹婦の情死と同一視され度くない』と云ふので、隈畔が情婦岡村某と市川の旅館に滯在中認めた日記を、何等か適當な方法で社會に發表しようと計畫してゐると言ふ。

處が新聞に發表された日記の一部を見ると、何處にも彼の死が匹夫匹婦の死と異る理由を見出す事が出來ないのである。『一切を捨てゝ現實を超越する何等の勇敢ぞ、永遠の美と愛とに心行くまで憧憬する何等の神秘ぞ！川（市川）を渡つて永劫の彼岸に旅立つ何等の嚴肅ぞ！』と言ふのが、彼の日記の中の代表的な文

句であるが、之が匹夫匹婦の所謂『あの世で添はう』と言ふ心意氣と、一體如何なる相異を持つのであらう。

たゞ匹夫匹婦は哲學者でない悲さには、斯う言ふ高尚(?)な辭句を使ふ事が出來ない。然し辭句の如何と言ふ事は結局末の末の問題であつて、それが情死の價値を上下せしむる何等の偉力も持たない筈である。彼れの死を哲學的煩悶の結果であると言ふ如き事は、此親切な友人達の最負の引き倒しである。如何に無學な匹夫でも四十にも近くなつて、妻子を抱へてゐる身で、若い女と道ならぬ戀に熱中してゐる場合に、仕事の上の不安や生活の不如意などが重つて來れば、聊か哲學的煩悶にも耽らざるを得ないだらうし、又その果は『永劫の彼岸』に旅立ちたい氣にもなるであらう。して見れば、此哲學者の死も匹夫匹婦の死も、同じ徑路を辿り同じやうな感情によつて行はれるものだと言はなければならない。

それにも拘らず、自分の友人であり哲學者であると言ふ事の爲めに、之を特別な哲學的情死でもあるかのやうに考へるのは、あまりに無邪氣な滑稽である。彼等がその無智な主觀論を弄ぶは御自由だが、匹夫匹婦の情死に對する冒瀆だけは固く慎んで貰ひ度いものである。

二人の殉難者

安田が刺され原が殺された。世間は今更のやうに彼等の功罪を尋ねたり、受難の當否を論じたりしてゐる。安田の場合には彼れが一介の守錢奴に過ぎぬといふ事によつて、彼れの兇死は當然であるかの如く論ぜられ、其暗殺者に對しては志士的な名譽が與へられたやうだ。然るに原の場合には、事情は自ら異つて來てゐる。彼れは兎も角も一國の宰相であつた。彼れには世人の尊敬に價する人格があ

つた。從つて彼れの死は一般に哀惜され、暗殺者は前の場合とは自ら異つた待遇を受けてゐる。尤も是には、前の刺客が自ら割腹してゐるに反し、後者はそのまま囹圄の人となつてゐると云ふ事も關係してゐやう。

何れにしても、安田と原との場合に對する世人の感情は、全く異つてゐるやうである。これは金を卑しみ心情の美はしさを誇る封建的思想が、尙僅かながらも殘つてゐるからで、無理のない現象でもあるが、然し封建制度の倒壞と共に、その根據を失つてゐる此の種の思想に今尙ほ囚はれゐる事は、結局頑迷固陋の譏りを免かれない。

二人の功罪を論ずるには、現在の社會狀態と現在の根抵的精神とを標準とすべきである。安田は現代の商人として、一個の資本家として洵に模範的な人物であつた。彼れの生活の全部は資本の增殖といふ任務の爲めにのみ捧げられてゐた。原は資本主義的大政黨の首領として、資本階級の政治的支配が進むと共に、不完全ながらも日本最初の平民內閣—ブルヂオア內閣—を造つた最も現代的の政治家である。彼等二人は資本主義進行の流れに從つて、最も忠實に其任務を盡した人人である。彼等は何れも斯かる進化の途上に於いて重要な功績を擧げた人々である。彼等を批難し攻擊すると云ふ事は、彼等に據つて立つ所の精神を否定する者ならでは、絕對に許す可からざることである。

彼等は何れもその信念の爲めに勇敢に戰つた人であつた。然し乍ら彼等の此信念は資本主義の進行發展の爲めであつた。その事の是非は兎も角、彼等はかくて相當の功績を擧げる事が出來たのである。然し社會の資本主義的支配が甚しくなるに伴れて、現在の如き頽廢的衝動的な風潮が生れるのも亦必然の過程であると見なければならない。

二人の刺客が、如何なる動機、如何なる刺戟によつて此兇行を演じたかは吾々の容易に知るを許されない事柄であるが、刺客に働いてゐる社會的なる遠因は、

恐らく社會の斯る過程、斯る風潮によるものであらう。して見れば原、安田の二人は資本主義の進化發展の爲めの勇敢なる戰に從つて其信念の爲めに倒れたものとも見る事が出來やう。斯くの如く考へて來るならば、彼等は何づれも資本主義發展の爲めの偉大なる犧牲者であると言はなければならない。その間に輕重厚薄の差を附す可きではない。二人は等しく世人の熱い感謝の涙に葬らるべきものである。

刺客の新模型

刺客と言ふと、必ず東洋風の豪傑で常に國事を談じ悲憤慷慨してゐるやうな青年を聯想する。それは從來の刺客が必ず此型の人物であつたからである。伊庭想太郎でも來島恒喜でも岡田滿でも、最近の朝日平吾でも皆この型であつた。

然るに原敬を刺した中岡艮一は、之等の連中とは全くタイプを異にしてゐる。彼れは狂熱的な詩人である。歌を造り小說を書く感傷的な文學青年である。彼れが手帳の『九月一日を記憶せよ』と言ふ謎の一句は、彼れが應募した懸賞脚本の當落が決定される日であつた。心血を漉いだその脚本の落選によつて、彼が如何に落膽し幻滅したかと言ふ事は今度の兇行に何等かの關係があるのかも知れぬ。彼れには特に政治的興味や意見やがあつた譯ではない。

斯くの如き文學青年の間から、狂暴な刺客が現はれやうとは何人も考へ及ばなかつた所である。此の新傾向、それは何を表すものであるかは明かに知る事が出來ないが、從來不良少年の間に於いて、硬派から軟派への推移が行はれて來た事は、吾々に何等かの暗示を與へるものであるかも知れぬ。

嘗ては不良少年とさへ言へば、腕力を誇り高談放語する壯士風の青年であつて

從來の刺客は皆この不良少年と型を同じうしてゐる。處がその後軟派の不良少年が現はれて來た。彼等は前者に較べて全く型を異にしてゐる。彼等は著しく近代的であり、文學的であつた。高談放語するよりは女を逐ふと言ふ青年であつた。今度の中岡が有する傾向は、此軟派不良少年の型である。惰弱な臆病な文學青年の中から、かゝる狂暴な兇行者が現はれて來たのである。

不良少年の中心が硬派から軟派へ移つたのが、社會の發達が人心に與へた何等かの變化にあるものとすれば、此新らしい型の刺客が現はれて來ると言ふ事も、また自然の傾向ではあるまいか。

戰術の二側面

紐育ヘラルド紙の報ずる所によると、數ヶ月前から密かにチエサピーク灣で實驗されてゐる空中魚雷は陸海の戰術に一大革命を齎らすものであるさうだ。此魚雷を有する航空隊が長驅する限り、沿岸防備といふが如き事は全く無用となり、襲はれた市街は忽ちにして焦土と化して終ふと言ふ。それは空中魚雷の實戰に對しては總て放射線を取扱ふ事になつて居るので、二百哩の遠距離の目標にも、適確に百發百中するからださうである。

此偉大なる新武器の發明に敬服する者は、又同時に此非人道的發明と、人類の平和を高唱し軍備制限を主張する彼等の心事との間に、一體如何なる關係あるかを知るに苦しむであらう。然し乍ら人生は複雜である。表面相反することも、時には同一の理由から發生し得るのである。

吾々は今日の狀態の下に、人類協和、軍備撤廢といふが如き理想論を主張する事は、結局無邪氣な空想か、狡猾な政策かに過きない事を信ずる者である。米國の軍備制限論に對しても、怜悧なる彼等が、まさかトルストイアンもどきの空想

から此主張をするのではなからうと思つてゐた。然し乍ら、彼等が狡猾なる政策から平和論を唱へるのだと言ふ事も、別に明かな證據がない以上、輕々しく斷定する譯には行かなかつた。

然るに今、羨む可き新武器の發明が成就された。そして彼等は甚だ矛盾した行爲を爲して居るやうに見えて來た。然し乍ら吾々はこれによつて、始めて彼等に對する疑惑が一掃された。果して彼等は、無邪氣なる人道主義者ではなかつたのである。彼等にとつて、平和論、非軍備論は、空中魚雷の發明と同一の信念の下に、同一の目的の爲めに編み出されたものであつた。非軍備論と空中魚雷とは、米國の軍隊の爲めに同一の任務を果して呉れるものであつたのだ。

吾々は彼等が空中魚雷を發明した能力に感服すると同時に、平和論を案出した發明力には更らに多くの敬意を表さぬばならぬ事になつた。卽ち此表面甚だしい矛盾であるかに見える新武器と非軍備論とは、同一戰術の二側面であつたのである。吾々は彼等の戰術の巧妙さに驚くと共に、複雜なる社會人生の因果關係にも驚異の眼をみはらずには居れないのである。

勇敢なる海相

加藤海相は桑港に於いて、內外の新聞記者に向つて『予は八八艦隊を完成せしめざる可らざる責任を有す。されば予が心から熱心なる海軍軍備縮小の意嚮を有すといふは、是れ全く誤りなり』と語り、且つ米國通信員に答へて、外國さへ日本と同樣の行動をする事を承諾すれば、日本も亦八八艦隊を縮小するに躊躇するものでないと言つた事は『その後未だ他の如何なる國も、予が曾てなしたる如く海軍制限の具體案を提示せざる以上、其言葉も其場限りの者なり』と聲明した。

此陳述は全米國の新聞に無線電信を以つて通信され、日本海軍の當局者は非常に驚愕してゐると言ふことである。日本の政府當局が、華府會議に對して事毎に戰々兢々としてゐるに拘らず、大膽にも此の陳述を公にした加藤海相の勇氣は、實に見上げたものである。

華盛頓會議が、戰術的平和會議である以上、徒らに平身低頭して、不利益なる縮小を約束して來ると言ふ事は、決して日本の安全を圖るものではない。恐る可き新武器を發明し、相對的條件ならば將來に於いて比律賓及びゲワムの武裝を解く事を承諾していゝと言ひ乍ら、軍隊の宿老を比律賓總督に任じてゐる米國に對して、八八艦隊の計畫を飽く迄遂行せんとする意嚮を發表する位の事は、何も遠慮する必要のない話である。

彼れはその後、これに對して『敢て訂正の要なし』と語つたとか言ふ。全くそれで好いのである。遠慮せずにしつかりやつて呉れ。

白色と有色の爭ひ

前印度總督のチエルムスフオード卿は、英國上院に於て『印度問題の主要なる點は人種問題であつて、之れは單に印度だけの問題ではなく世界の問題だ。白人の優越に對する全有色人を通じての反抗である』と述べた。

又晩香坡のジー・エス・ヘーンズ氏は『日英同盟を終了せしめ英領コロンビアから、亞細亞人種を全部排除す可し』との提案を英領コロンビア立法部に提出したさうである。

かゝる叫びが聞える一方、米國では排日の氣勢が益々盛になつて來てゐるし、人種的反感、人種的對立といふ事は次第に明白な問題となつて來たやうである。これは、人種的感情、人種的團結といふものが、強い潜勢力を持つてゐる限り、

避く可からざることであつて、人種的なる闘爭は、吾々の必然に當面せざるを得ないものである。

世には萬國主義を唱へ、非軍備論を主張する超國家思想家がある。近頃しきりに軍備縮小の運動を起して、華府會議の目的を達せしめようとしてゐる政治家や宗教家もそれであれば、資本主義と軍國主義とを混淆して、一切一とまとめに倒す可きものとしてゐる社會主義の群盲もそれである。

然し乍ら、人種的感情は一朝一夕に成り立つたものでもなければ、彼等が勇敢に一撃する事によつて、忽ち消滅して終ふやうな生優しいものではない。それは他に何等かの闘爭が行はれてゐる間こそ潜伏して居れ、一とたび他の闘爭、他の緊張が失はるれば、忽ち強い勢ひを以つて勃頭し來たるのである。

人種的感情といふものは、今尚強い社會的結合の紐帶となつてゐる。人種的結合は、一種の中心的結合を爲してゐるものであつて、近い將來に於いて此結合が失はれやうとは到底考へ得られない。從つて此人種的反感、人種的對立なるものは容易に人類社會から抹去し得るものではない。斯くの如き團結が存在し、斯くの如き感情が存在する以上、自ら優越を誇つてゐる白人種が、吾々有色人種を侮蔑し排斥するは亦當然の事柄である。

然るに萬國主義者は、斯くの如き感情を抱く事は不合理であり、偏狹であると言つて嘲笑する許りである。偏狹の誇りは、相對立し相闘爭してゐる場合何人に對しても用ゐる事が出來る。資本家階級が偏狹だとも言へれば、白人種族が偏狹だとも言ひ得るのである。然し乍ら、此偏狹なる感情の生れ來たる事に、必然の原因がある限り、吾々も亦偏狹となつて相爭はなければならないのである。

斯くの如く觀じ來たるならば、吾々は此白色人種間に於ける、有色人排斥の叫びを、單なる人種的偏見としてのみ嘲笑してゐる譯に行かぬ。必然に來る可き禍に就いては、十分の準備をして置かなければならない。

夢想の罪

世の中には美はしき觀念上の世界に逃避して、獨り自ら高しとする計りではなく、抽象的なる觀念を以つて、現實の世界を動かし得ると信じてゐる者がある。

彼等は英米の巧妙な宣傳に世界の平和を夢み、正義人道の樂園を夢みた。そして平和思想の普及、軍備制限の貫徹等と稱して宣傳してゐたのである。尾崎行雄君一派の輕燥な政治家や、基督教徒の群や、空想的勞働運動者の群などが卽ちそれであつた。

彼等の煽動によつて、多少ながら軍備制限の輿論も湧いた。そして見事に我々は屈辱的軍備縮小に甘んじなければならぬ事となつて了つた。然し屈辱はこれ丈けで終るものではない。更に今度は、太平洋防備制限と稱する美名に隱れた日本の防備鎭壓策に遭遇せねばならぬ事となつたのである。英米の主張は、多數の力を恃む極めて專横な、平和や人道とは似ても似つかぬものである。

この提案が、如何に平和を無視した辛辣な戰術であるかと言ふ事は、お目出度い平和論者にしても、氣が付かぬ筈はない。英米は此提案に於いて、露骨にその假面を脱いだ爭鬪的本性を表はしてゐる。斯樣な明かな事實を見せ付けられては彼等觀念論者が樂園の夢も少しは醒めていゝ筈である。煽てられた國民の感情も此事實を見ては少しは納つた事であらう。

英米の老獪は始めから知れ切つた問題である。彼等が、平和と人道とを楯にして、其野心を充さうとしてゐた事は、言ふまでもない話であつた。然し日本が隙さへ與へなければ、斯くまで露骨に其本音を出して來る事は無かつたであらう。軍備縮小丈けで甘んじてゐた事かも知れなかつたのである。

然るに、英米が斯くまで露骨に出て來たのは、乘ぜらる可き隙が、日本にもあ

つたからなのだ。その際とは何であるかと言へば、卽ち觀念論者の輕擧盲動である。手つ取り早く言へば、皆があまりいゝ氣になつて、尻馬に乘り過ぎたからなのだ。

巧みに乘せられて、馬鹿々々しい目に逢ふ事になつたものである。今となつては多勢に無勢、日本も此暴案に泣き寢入る外はあるまいが、承認する事もしない事も、共に苦しい立場である。――然しそれにしても、かゝる難關を招來したのは、一知半解の夢想家の經擧盲動に在る事を思ふと、今更らながら女子と小人の養ひ難い事を痛嘆せざるを得ない。

これが平和か

海軍縮小の比率問題で、その專横振りを發揮した英米は、今また太平洋の防備制限に就いて脅迫的態度に出でやうとしてゐる。海軍軍備の縮小が、實は日本の海軍を抑壓しようとする企てであつたと同樣、今度の太平洋防備制限も、日本の防備を制限せんとするものであつて、寧ろ日本近海防備制限とも言ふ可き不法極まるものである。

太平洋の防備制限と言へば、甚だ聞えも好いけれど、制限區域は北緯三十度から赤道に至り、東經百八十度から支那沿岸に亙る範圍に限られて居り英米の海軍根據地となり得る地點は、全部除外されてゐるのである。我國本土の一部なる琉球や小笠原島に對してすら、防備の制限を行はうとするのは、果して平和を高唱し人道を重んずる太平洋會議の目的に添ふものであらうか。聞く處に依れば、彼等は多數の力を以つて斯かる高壓的制限を主張しながら、英國はニューギニアに米國はカラバコス群島に、防備を施さんとしてゐると言ふ事である。

日本近海の防備さへ撤廢すれば、彼等が如何に防備に沒頭してゐても、世界の

平和が保たれると言ふのであらうか。太平洋中の極小部分の防備のみを撤廢して見た所で、それは何等世界の平和を確保する道とはならない筈である。英米に從へば『元々防備制限は太平洋西部に限る精神』だつたと言ふが、斯かる片手落の制限は一體何を意味するものであらうか。

彼等は、此制限案が容れられないならば『太平洋會議の成果はゼロとなる次第で、是れは一に日本の責任である』と稱してゐるさうだが、元來太平洋會議は何を目的とし、何を看板として行はれたものであつたらうか。それは世界の平和の爲め正義人道の爲めであつた筈である。若し斯かる制限案が通過する樣なことがあれば、それこそ世界の平和を紊し、正義人道を蹂躙することになるのではなからうか。

然し乍ら、斯かる横暴な主張が容れられぬならば『太平洋會議の成果はゼロとなる』と稱する彼等の本音に依つて、吾々は太平洋會議の本來の目的が如何に醜陋な非平和的欲求の充足にあつたかを知る事が出來る。世界の平和を唱へ正義と人道を重んずると稱する事が、如何に狡猾なる戰術であつたかと云ふ事を、今明かに知る事が出來るのである。

子寶勳章

帝國小學校長西山哲治氏は、贊成者五百五十五名の連署を得て、愈々本會議に子福者保護に關する請願書を提出する事とした。

この請願書の要旨は、三人以上の子福者に對し、勤勞による所得稅を免じ、必要の場合には女中費及び教養費を補助し、且つ子寶勳章を授けて其功勞を表章することとした上、若し斯かる子福者が死亡して遺產の少い樣な場合には、一定の

年金を附與して子供の教養費を扶ける樣にして貰ひ度いと言ふのである。

貧乏人の子澤山と言ふ諺の通り、子福者の多くはプロレタリアであるから、斯かる請願が容れられるとすれば、女中費、教養費の補助などに、莫大もない經費を要する事だらう。請願人中には吉田熊次、留岡幸助、宮田修など云ふ名士も多いと言ふ事だが、一寸通りさうもない請願である。

若し萬一斯かる請願が容れられ、實際に行はれるならば、果して如何なる意義を持つものであらうか。プロレタリアにとつて所謂子寶が殖える事は、單にその養育に惱まされると云ふ直接の負擔がある計りではなく、やがては勞働人口の過剩を來し、賃銀の一般的低下を促す事となつて、プロレタリアは更に一層の貧窮と悲慘の淵に導かれると言ふ間接の苦痛をも齎らす事となるのである。

子寶保護の請願が容れられるとしても、幾分緩和され得るのは、この直接の苦痛丈けであつて、より大なる間接の苦痛は緩和されるどころでなく、却つて產兒が奬勵される爲め、一層甚しくなる計りなのである。賃銀が低下し貧困が增加すると言ふ苦痛は、プロレタリアにとり、子寶勳章によつてゴマ化され得る程單純なものではない。

子寶勳章の制定は產兒の奬勵を意味するものであるが、一體これに依つて保護されるのは何人であらう。それは寧ろ、プロレタリアの子福者ではなくて、勞働人口の增加によつて搾取を容易にされるブルヂオアそのものではなからうか。

家庭より社會へ

女子高等師範では、近來家政科の入學志願者が激減し、その代り文科、理科の志願者は、從來の十倍位に增加して來たと言ふ。これは恐らく、卒業後獨立して

生活する爲めに、單に學校の教師として丈けではなく、廣く社會に職業を求め得る便宜の爲めに應用の利く學科を修めようとする要求の然らしむる所であらう。從來は彼等もすべて家庭の人となる事のみを目的としてゐたのであらうが、男子の保護に依つて生活を營むと言ふ事は次第に望み少なくなつて來たので、斯かる中流の少女までが、獨立の職業を得んとするに至つたものであらう。

婦人には一體に容易を求むる心から計りでなく、社會に對する自誇を保つて行かうとする要求から、好んで家庭的城砦の中に閉ぢ籠らうとする傾向がある。それ故近世に至るまで、婦人が出でて職業に從ふと言ふ事は、甚だ例外的な現象であつた。然るに產業革命が行はれ、新らたなる生產業が續々として起るに從つて生產勞働は單純化され、且つ男子勞働者の賃銀は一體に低下して來たので、家庭內に安住してゐた無產階級婦人は續々として工場內に流れ込む事となつたのである。

然し乍ら婦人が家庭より出でて職業に就く事は、初めは勞働階級のみに特有の事であつた。然るに斯くの如き新生產組織に附隨して起つた資本主義が、極めて主我的、個人的なものであつた結果、社會はかゝる主我的、個人的思想の支配に委せられる事となつた。婦人も亦かゝる潮流から免かれる事は出來ず、時と共に個人主義的感情を植えつけられて來たのである。斯くして婦人の個人主義的精神の要求は、資本主義社會の發達に伴つて生じ來たる男子の晩婚化と對峙して、家庭より社會へ――の勢を助長する事となつた。卽ち婦人が職業に從事する事は、單に勞働階級のみの特殊な現象ではなく、漸次に上流の階級へと普遍し來つたのである。

日本に於いては、歐米に比べて資本主義の發達が甚だ遲れてゐた。從つて婦人が職業に就く事も、また歐米の如く普遍化してゐなかつたのである。中流婦人の大部分は、結婚し得る望みを持ち、且つ結婚することに依つて男子の扶養を受け

る可能性を有してゐた。女子教育の大部分は、斯かる婦人の爲めに行はれるものであつた。故に女子教育は結婚の方便として行はれてゐたのである、女子高等師範の如きも、行く行くは男子の扶養を受ける希望を持つ生徒に滿たされてゐた譯である。さればこそ家政科なるものが、多くの少女を引き付ける事が出來たのであつた。然るに社會の進歩は漸次に婦人をして斯かる希望より遠ざからしめた。家政科よりも、文科、理科の希望者が多いと言ふ現象は、卽ち斯くして生じ來つたのである。

女子教育と社會

女子教育界の耆宿下田次郎氏は、讀賣新聞紙上に、其意見を述べて、日本の女子教育が歐米に比し何うしても二十年位遲れてゐると言ふ事を痛嘆された。

氏の言はれる通り『婦人は單に婦人であるといふ事丈けで昔は男子の保護を受けて大體安全に生活して來たが今日は必ずしも男子の保護のみに依賴する事が出來なくなつた。』それ故斯かる社會に處す可き現代の婦人は、男子と同樣に自己の實力を養ひ、生活上の手段を得る爲めに勉强す可きであるにも拘らず、日本に於いては今も尙教育を單なる結婚の方便として居る。從つて女子教育は甚だしく緊張を缺いた間の延びたものとなつて居り『その進歩の跡を見ると、殆んど符節を合せた樣に、歐米女子教育の進んで來た途を進んで來てゐる』にも拘らず、日本の女子教育は歐米のそれに比べて、約二十年程遲れてゐると言ふのである。下田氏の殘念がられるのは卽ち此點で『十一年度には父兄も子女も、教育者も大に努力して、此遲れを挽回しなければならない』と言ふ。

實際、婦人が男子の保護に依賴し得る可能性は、年と共に減少して來た。曾に

生產組織の進步が、婦人の勞働機會を多からしめる計りでなく、生活難や、その個人主義的要求に基く男子の晩婚化は、漸次に上流の婦人までを經濟的に獨立せしむる事となつて來たのである。これまでは家庭に閉ぢ籠つて隋眠を貪つてゐた婦人も、冷酷な社會の中に生活の爲め戰はねばならぬと云ふのが、今日の有樣である。斯かる傾向に對應して行くには、婦人も亦男子と同樣生活上の實力を得る爲めに敎育を受けなければならない。從來の如く結婚の一資格として形式的な敎育を受くるに甘んじてゐる事は出來なくなつたのである。

然し乍ら、斯くの如き社會の傾向は歐米に於いては一層甚だしい。それは歐米に於ける社會の發達程度、即ちその資本主義化が日本よりも一層甚しい爲めである、歐米の女子敎育が斯かる社會の傾向に適合したものである以上、日本の女子敎育に較べて著しく進步してゐる事は、當然の現象だと言はなければならない。

元來、敎育と言ふものは、其時代の經濟關係を反映し、社會の要求に迎合して變化し發達するものである。然るに社會の經濟的發達は、常に同樣の經路を踏み同一の法則に支配されて發達するものである。日本の女子敎育が『符節を合す樣に』歐米女子敎育の發達した跡を迎つてゐるのは、恰も日本に於ける社會の發達が、資本主義の進行が『符節を合す樣に』歐米の跡を迎つてゐる所から生ずる避け難い事柄である。それ故、女子敎育が歐米に比べて二十年遲れてゐると言ふ事は、直ちに日本に於ける資本主義の進行が、歐米に比べて二十年以上遲れてゐると言ふ事を明かに證明する事となるのである。

下田氏の痛嘆される此女子敎育の差異は、資本主義の進行程度が異る以上、當然避く可からざるものであり、東西の資本主義が全く同一程度に發達する迄は、決して挽回す可らざるものである。如何に『父兄と子女と敎育者』とが努力するにしても、斯かる社會の發達程度の差異を超越する事は出來ぬ筈である。然し乍ら守舊的である事を原則とする敎育界に、下田氏の如く女子敎育が生活上の手段

として、眞劍に行はれなければならぬ事を說く人が表はれた所を見ると、日本の資本主義も次第に歐米の跡を踏んで進んで來た事が肯かれ、從つて日本の女子敎育が漸く眞劍になつて來た事が測り知られる。

觀念と現實

婦人平和協會の幹部である塚本濱子氏は、世界平和の思想を日常生活の上にも徹底させ『日本の狹い道德を廣くしたい』と云ふ協會の目的の爲めに、平和思想の普遍化を計り度いと新聞記者に語つてゐる。

この目的の爲めには、例へば『子供が机に頭を打つて泣き出した時に「この机が惡いのですよ」と言つて、罪もない机を打つたりして、其子供を慰める』と言ふやうな習慣を改め、日常の道德をも改良しなければならぬと言ふのが氏の意見である。何故斯かる習慣を廢止しなければならぬかと言へば『それは子供の復讎心を煽る素となり、此精神が增長すると、矢張り獨逸が惜かつたり、米國が惜かつたり』して來るのだからださうである。

平和思想、徹底も、日常道德の改良も甚だ結構であらうが、すべての思想や道德は、社會に於ける事實の示す傾向に從ひ、若しくはそれを代表してゐる場合にのみ實在性を有する。今日の社會に於ける事實が、平和思想や基督敎的道德と全く矛盾してゐる以上、机を打つ習慣を廢止する位の事で、平和的感情が養はれたり、復讎的な道德感が改められたりするものであらうか。復讎の感情は決して机を打つ習慣などに依つて養はれて來たものではない。よし斯かる習慣の中に成長する事ありとしても、目前に經濟的反目、人種的鬪爭の事實が存在する限り、何うして復讎心を煽られずにゐられるであらう。日本人の道德觀念が狹いにせよ廣

いにせよ、斯かる道德觀念の存在を必要とする事實が存在してゐる以上、それは決して基督敎婦人達の運動に依つて變化せしめられ得るものではない。

平和論者の安住してゐる觀念の世界と現實の世界とは全く異つたものである。觀念の世界で、彼等が如何に躍起となつてゐやうとも、それは毫も事實を動すものとはならないのである。

泰平無事の三ケ日

新聞の傳へる處によると、今年の正月は極めて泰平無事に過ぎた。三ケ日の間警察事故など殆んどなく、最も人出の多い淺草公園でさへも喧嘩沙汰一つ無かつたと言ふ事である。

これまでは正月とさへ言へば、千鳥足の年賀客か、一杯氣嫌の若い衆などが、至る處の通りを右往左往して居り、酒に付きものの喧嘩騷ぎなどが頻々として持ち上つたものである。然るに近來は、街を行く醉漢の姿も、喧嘩口論の數も減つて來た。そして賑やかな悠長な正月の姿は次第に失はれて來て、今年の樣に恐ろしく泰平無事に過ぎる事さへある樣になつて來たのである。

これは世間でも普通に言つてゐる如く、世の中が世智辛くなつて來たのと、人間が段々利口になつて來た事から生ずる現象である。人間の生活から一切の情熱的部面が失はれ、すべての行爲が理智的になつて行く爲めに生ずるものなのである。斯くして人間生活は科學的となり、機械的となつて行く。——これは吾々人類が當然辿らねばならぬ過程であり、社會進化が生む所の避け難い現象である以上、是非善惡の評價を加へる事は許され得ない事ではあるが、然しあまりに社會が打算的、機械的となつて靜まり返つて行くのを見ると、つひ酒でも飲んで喧嘩

の一つもして見たいと云ふ謀反氣が起るのを防ぐ事が出來なくなる。

主觀過重の弊

近頃、戀愛事件が頻々として起るやうになつて來た。此傾向に對して、本間久雄君は日々新聞の文藝欄に一文を發表して、これを『戀愛過重の思想が釀した弊害』であると見るのは大變の間違ひであり、日本の社會では『今日また〳〵戀愛過重どころか、戀愛輕視の狀態にある』事を說いてゐる。

證據のない抽象的の理屈は何うにも付くが、頻々たる戀愛事件、殊に白蓮事件以來滅切り中年婦人の離婚數が殖えて來たと云ふ統計上の事實は、本間君の所謂『戀愛過重の思想』を除いて何處にその社會的原因を求む可きであらうか。近頃淺薄皮想な文藝思潮が普及した爲めに、信實を最も重んず可き事とし、主觀の上で眞劍でさへあればすべてが許されると云ふ風になつて來た。主觀的に見れば、戀愛が眞劍なものである事は言ふまでもない話である。其處で戀愛は尊ぶ可く、戀愛の爲めなら大學教授の椅子を棒に振るもよし、妻子を殘して若い女と情死するもいゝと言ふ事になつた。亭主を足蹴にして出奔する事も、眞劍な戀の爲めなら寧ろ同情せねばならぬといふ事になつて來たのである。

今日の有樣は、齒の浮く樣な戀愛神聖論が流行した星菫派時代と何の選ぶ處もない。皮相的な『戀愛過重の思想』が跳梁してゐる以上、戀愛事件が常に世間を騷がしてゐる事に不思議はないが、かゝる戀愛事件の頻發を以つて、戀愛過重の思想が生むのでないと言ふのは一體如何なる理由であらうか。それ計りでない。本間君の言ふ處に從へば、戀愛は今日の社會に於いてまだ〳〵輕視されてゐるのであるが、本來『戀愛は極めて重要視さる可きもの』であると言ふ事である。然

し戀愛が如何に當事者の主觀に於いて重要なものであるとしても、それが直ちに人生に於ける重大問題、卽ち人間生活を客觀的に見た場合の重大問題となる筈はない。戀愛なるものは、人間の性欲生活に附隨する觀念的存在である。

重視、輕視は兎も角として、人生に於ける問題とされ得るものは、卽ち客觀的考察の對象とされるものは、かゝる觀念的存在ではなく、寧ろ性欲生活そのものである。性欲の發動と充足との距離が次第に隔てられて行く處の、社會的傾向そのものである。從つてかゝる傾向から生ずる處の――それは丁度ニキビ中學生が女性を神秘化し、戀愛を神聖視する如く――星菫派の戀愛過重論が跋扈し本間君の如きその代辯者が表はれると言ふ現象そのものなのである。更にまたかゝる戀愛過重の思想が、主觀上の眞劍を過重する思想と結んで、家出事件、情死事件の辯護に努め、かゝる事件の發生を促してゐる事實そのものが、人生に於ける問題となり得るのである。

主觀は常に客觀的事實に伴つて發生する。客觀的條件が變つて來れば、主觀も亦當然變化して來なければならぬものである。一定の狀態に置かれた場合。一定の主觀が發生すると云ふ事は判り切つた話である。此主觀の端くれを捉へて、眞劍であるとか、熱烈であるとか感激し、その爲めには他のすべてを許さうとするのは飛んでもない愚劣な話である。斯くの如くんば千三つ屋の信ずる一攫千金の夢も、眞劍な尊敬す可きものであり、人生に於いて重要視しなければならぬものだと言ふことになるであらう。本間君と云ふ人は一體何歳ぐらゐの男かは知らないが、斯う言ふ氣の若い話を聞くと、濱の眞砂と共に盡きないのは、世に盜人の種ばかりでない事を嘆ちたくなる。

客觀か獨斷か

主觀を尊重し過ぎると、本間久雄君のやうなお芽出度い事になつて了ふが、さ

りとて又客觀の過重も、一歩踏み違へると飛んでもない間違を生ずる。此最も好い例は、客觀派の元締のやうな顔をしてゐる堺利彦氏が、宮地嘉六君の離婚事件に際して、踏み滑らした一言である。

堺氏が新聞記者に語つた處によると、宮地君が結婚したのは小說を書く爲めの手段であつた。そしてそれが證據には、宮地君の結婚生活からは『群像』と言ふ小說が生れてゐる――と言ふのである。人間の行爲を單に結果からのみ見ることが許されるならば、此理屈も成り立つであらうが、過程を無視した結果觀は、畢竟する處一個の獨斷に過ぎないのである。

宮地君の場合にしても、久しく憧憬してゐた結婚生活を始める時、今日のやうな幻滅の日を豫想してゐる筈はなく、況して結婚する事によつて小說の材料を造らうなどと言ふ事が、最初から意識に上つてゐる筈もないのである。たゞ後の結婚生活が破壞される樣な、何等かの條件が潛んでゐた爲めに、彼れの主觀の如何に拘らず、少しも豫想されなかつた結果が生じて來た迄である。此場合如何なる條件の下に、如何なる經路を經て、かゝる結果が生じたかと言ふ事を觀察してこそ、客觀的な態度だと言ふ事も出來やうが單なる結果のみを捉へて、初めから斯かる結果を豫想して行はれたものでもあるかのやうに見るのは、客觀に似て非なる獨斷的觀察であると云ふの外はない。その上他人の行爲に對してかゝる獨斷的觀察を公表する事は、往々人を傷ける事にもなるのである。若し何人かゞ堺氏に向つて『お前は社會主義を生活の手段としてゐる。その證據には現に社會主義によつてのみお前の生活が支えられてゐる。お前は社會主義商だ』と言つたならば一體何と感じられるであらうか。

地主の『社會奉仕』

近頃『社會奉仕』の爲めとか、小作人問題の解決を計る爲めとか言つて、耕地

の分讓を行ふ地主が表はれて來た。新聞記者の讃辭に依れば、彼等は何れも『時代の先覺者』なのださうだが、果して社會奉仕の爲めか何うかと云ふ事は、福島縣中村町の相馬子爵が所謂『土地解放』を敢行した時の、小作人の困り方を見れば、よく判る。即ち東京日々の記事に依れば、借地人たる『中村町民は突如として此報に接し金策に窮したので、尙「當分今日までの方法で借地せらるゝ方法なきか」との心情から「借地人會」を急設し、借地人連署の嘆願書を提出する事とした』といふ有樣であつたのである。

かくの如く土地分讓が、借地者にとつて有難迷惑なことであるとすれば、地主等の社會奉仕は一體何を目的として行はれるものであらうか。社會奉仕といふ言葉は、近來頻りに用ゐられるやうであるが、そして種々曖昧な意味に用ゐられてゐるものであるが、此土地分讓に至つては、全然『自己』奉仕であつて『社會』奉仕ではないのである。即ち農業の利潤率が他の生產部門のそれに比べて著しく低下して來たので、農業生產に投じてゐた資本を引き上げて、他の企業に放下しようとする試みが、此の社會奉仕といふ美名の下に行はれる事となつて來たのである。

此現象を見て、小作人階級が擡頭し、農村に於ける勞働爭議が盛になつた結果地主が覺醒して來たものであと考へるのは大なる誤りである。地主が覺醒したのは、決して農業生產の利益を壟斷する事の非ではなく、實に農業利潤率の低下して來た事である。收穫低減の法則に支配されて、農業資本の生む利潤が減退して來た事と、他の企業に於ける利潤率が比較的騰貴してゐると言ふ事とを自覺して來たのが、彼等をして所謂『社會奉仕』の土地分讓を敢てせしむるに至つた唯一の理由なのである。

地主の持て餘してゐる耕地を貧困無力な小作人に持ち續けて行ける筈がない。假りに年賦償還で讓り受けたとしても、結局抵當に入れるか、賣り放つて了ふか

するの外はないのである。されば、土地分讓が行はれる事によつて、小作人が消滅する筈もなければ、農村に於ける勞働問題が解決される筈もない。たゞ此驚嘆す可き、地主の覺醒によつて『奉仕』されるものは、地價の高い間に耕地を賣り放し（恐らく今が地價高騰の絶頂であらう）、他に高率の利潤を求める處の地主それ自身である。

此子、此母

鳩山一郎君は議會の食堂で、其柔道二段の腕を振つて鈴木富士彌君を撲つた。吾々田夫野人なら兎に角、人物が人物であり、場所が場所柄だけに騒ぎは一層大きくなり、檢事局が起訴するか否かと云ふ事が、しきりに問題となつた。

彼は亡父の威光で政友會内部に相當の地位を占めてゐる計りでなく、賢母良妻二つながら備へた幸福者であるが、女子教育界の大立物である道德堅固の賢母の教養にも似合はず、瓦斯、滿鐵等の疑獄が起る毎に兎角の噂を生む上に、選擧運動の陣頭にまで立つて侍いて呉れる『良妻』を持ち乍ら、品行頗る不良だとの事で有名になつてゐる人物である。

此不肖の我儘息子が、議會で不意打ちの腕力を振つたと云ふ丈けでも聞き捨てにならない事だのに、賢明なる可き『賢母』が一緒になつて憤慨し『女でもあたしや撲つてやり度い位です』と傳法肌の啖呵を切つて居るに至つては、愈々以つて聞捨てならない事件である。亡夫と吾子の自慢に沒頭し自分等だけが修身の教科書ででもあるかの樣な顏をしてゐる癖に、我子が不法な暴行沙太に及んで歸つて來たと言ふのに、別室に招じて戒るかと思ひきや――春子刀自は亡夫が女遊びをして歸つて來た時には、別室に招じて懇々と忠言を述べるのを常としてゐた事

を平生自慢話の種にしてゐるのである。――よくも敵を打つて來たと言はん計りの顔をして居る處を見ると、成程此母にして此子あり、一郎の日頃の行爲も、不肖の一言で片づける譯に行かぬと云ふ事を感じさせられる。

不德義呼ばり

鳩山母子が鈴木富士彌君を、不具戴天の仇敵のごとく惡罵してゐるのは、鈴木君が嘗つて鳩山家の書生をしてゐた癖に、代議士等になつて主家の若樣をやつけたと言ふ一事にあるさうだが、吾々は書生といふ家庭的勞働者とその使用主との關係を、普通の勞働者と資本家の關係以上に見る事が出來ない。書生と主人とを結ぶ唯一の紐帶は、單なる勞働力の取引に過ぎないのである。小規模の工場程、溫情主義的施設が整つてゐる處ほど、勞働者對資本家の關係が密接になつてゐるが、如何に小規模にしろ、溫情主義的であるにしろ、工場勞働者が資本家に反抗する場合を恩義に背くものと言ひ得ない以上、鈴木君が如何に一郎君を取つちめたからと言つて、不德義呼ばはりの出來る筈がない。

書生と言ふものは、昔の食客といふ主從的關係の形式の下に、低廉な賃銀でその勞働力を提供する處の勞働者である。如何に主人と密接であらうとも、それは多くの場合溫情主義に終るものであつて、その代償には低廉な賃銀を受けて働いてゐるのである。鈴木君と鳩山家との取引關係は、とうの昔に完了されて了つた筈で、今日彼れ是れ言ひ得るものではない。若し鳩山家がそれを今持ち出すと言ふならば、鈴木君は書生時代の提供して置いた賃銀以上の勞働力に對して、明かに清算して貰ふ權利がある。

こんな啖呵が通用するなら、勞働者の反抗運動が一切不德義である計りではな

く、資本家階級の御曹子連は、プロレタリア出の敵手が現はれる毎に、不德義ばはりの大見得が切れる事になる。

元老の凋落

『大御所』とさへ呼ばれて、恰も將軍のごとき勢力を政界に占めてゐた山縣公も、遂にその天命には敵し難く、八十何歳を一期として斃れて終つた。大隈侯、山縣公と引續く元老の死を見てゐると、元老の凋落、封建的政治勢力の沒落を、今更ら感じさせられる。

山縣公と言ひ大隈侯と言ひ、何れも維新の元勳であつた。維新改革の當事者として、その完成に貢獻した人々であり、その後の政治的權力を掌握して來た人々であつた。維新以前に於いては社會上、政治上の支配階級は武士階級であり、そして是等の維新の三勳は何れも武士階級の傳統を引いた人々であつたが、維新以後に於いて努力した事は、勃興し來たれる商工階級の直接間接の保護にあつたのである。商工資本家階級はその爲めに次第に勢力を占め、遂には封建的武士階級を驅逐して社會上の支配階級は、やがて政治的支配階級と一身同體になつた。維新以後達し來つた資本家階級は、かくて社會上の支配階級たると同時に、政治上の權力を次第に掌握するに至つたのである。

官僚軍閥と稱へられてゐるのは、封建的武士階級の傳統を繼承し來れる社會階級であつて、山縣公を筆頭とする元老の群に依つて代表されるものが卽ちそれである。この階級は維新以後の政治權力を把握し來つたものであるが、近來では新興資本階級の爲めに、次第にその政治的實權を喪失して來た。所謂平民內閣が成立し、資本家階級の代表者が政治的支配權を掌握するの現象はかくして生じて來

つたのである。

山縣公を大御所と仰ぐ官僚軍閥の勢力は、今日では甚だ微弱となり昔の俤を見る事が出來ないが、然も山縣公等の元老が存在してゐる間は、彼等の個人的勢力の爲めに、その傳統の爲めに、尙幾分の餘香を保つ事が出來たのである。然るに元老はかくして凋落して行く。山縣公の死に依つて失はれる官僚軍閥の勢力は、再び恢復する事が出來ぬのである。資本家階級の政治的征服が、かくて次第に進んで行く事は、今日の社會が殆んど完全に資本主義精神の支配下にある以上、到底避く可からざる勢ひなのである。商工資本家階級の保護發達に努めた官僚軍閥が資本家階級にその勢力を奪はれてゐる有樣を、殊に山縣の死と共に著しく沒落して行く姿を見るにつけても、社會進化の理法の冷酷にして動かす可からざるものなる事を痛感せずには居れない。

道德の威力

宣傳流行の時勢に促されてか、市役所や電氣局の役人達が主唱者となつて交通道德會なるものを作り、講演會を開いたり、印刷物を配布したりして、交通道德の宣傳を行ふことゝなつた。

東京市の交通狀態が、無秩序亂雜なのは仰しやる迄もないが、之を改善する方法を道路電車等の交通機關を改良發達せしむる點ではなく、市民の道德に求めたのは一體如何なる理由なのであらうか。亂雜なる交通狀態の唯一の原因は、交通機關の不備亂雜にあるのではないか。それが市民の道德のみに依つて解決され得ると云ふ理屈が立つならば、今日の亂雜無秩序なる富の分配も、又市民の道德に依つて改善され得る筈である。賢明なる政府當局者は、貧民道德會でも起して富

の分配狀態を改善する宣傳をやつたら何うだ。

盲と眼明

東京驛頭に弔旗を飜して出迎へる者があるとか何とか云ふ騷ぎの中に、德川全權は米國から歸つて來た。そして東京驛の貨物取扱口から姿を表はし警視廳の自動車に護衛されて歸邸した。

其癖彼れが新聞記者を引見した場合には『成功も失敗も見やうで違ふ。盲千人眼明千人の世の中だから、批評は諸君の自由に任せる』と大きく構へた。小笠原島の防備まで制限して來た彼等の成績を成功と見るか、失敗と見るかは今日殆んど一定してゐる樣である。さればこそ弔旗騷ぎも起つたのであらうが、盲千人眼明千人ではなくて、國民の大部分が盲であり、この成績を失敗と見てゐると言ふ事は、德川公には御氣の毒ながら又せめてもの慰めであり、不幸中の幸とでも言ふ可きであらう。

蒔いた種

去年あたりから政府がしきりに宣傳してゐた『過激社會運動取締法案』が、到頭議會に提出されることになつた。何しろ資本主義全盛の議會のことであるから、一も二もなく全院一致か何かで通過するものと思つた處、所謂『新人』とか云ふ半可通は、吉野作造、森本厚吉の徒に限られてゐる譯でないと見え、衆議院はもとより、貴族院にさへ反對者があると云ふのは、資本家政府と共に、吾人の聊か

意外とする處である。

院内の新人すら斯の如き有樣であるから、院外における一層新らしく、急進的である『新人』連が默つてゐる筈はない。やれ學者の反對演說會だとか思想家の反對懇親會だとか毎日の新聞に表はれる報導を見ると誠に賑やかなものである。新聞の三面記事だけを讀んでゐると、これでは折角の名案もお流れになるかと思はせられるが、世の中の事は却々さう單純に片着くものではない。如何に騷ぎが大きくならうとも、精々部分的辭句の修正位で法案が通過するであらうことは、間違ひのない形勢だと云ふ。

『盜人を見て繩を綯ふ』と云ふ諺があるが、この反對運動を見てゐると、今更ら繩を綯つた處で追付くものかと云ふ氣がして仕方がない。殊に滑稽なのは社會主義運動者などの反對である。蒔いた種なら刈らねばならない。身から出た錆なら諦める外はない。斯う云ふ法案に當面する覺悟は、とうから出來てゐなければならないのだ。それは取締られる社會主義者自身が、この法案を作らせたのだからである。

原因のない處に結果は生れない。過激社會運動取締法案を提出する政府の方には色々の理由がある。それに對しては、社會主義者の端くれである吾々でさへ、鎧を脱いで恐縮する外はない。法律の不備と新聞のお目出度さを奇貨として、絶え間の無い賣名騷ぎとそれをまたダシにしたブローカー、これで取締法案が出來なかつた日には、天下社會主義よりいゝ利廻りの商賣は無い事になるが、まさか今日の社會が社會主義營利業者の道具として造られたものでない以上、さうは問屋が卸さないのも亦止むを得ない話である。

大は遠く上海邊へ出稼ぎし、一攫した金の千分の二位をビラでも撒いて新聞紙上の宣傳廣告に宛てる處から、そのまた恩惠を覗ふ中處、小は五圓十圓の所謂『運動資金』を徵收して歩るく連中まで、大小とりぐ〳〵の活動が、引切りなしに行は

れたのでは如何に人の好い政府でも少しは取締る方法を考へずにはゐられまい。新取締法案の中に、國内は勿論海外でも宣傳の爲めに金を出した者を一緒に處分するとある邊り、成程々々と頷かれる。肝心の營利の道さへ塞いで置けば、この勇敢な運動者共が一齊に退却して行く事は、何人にも想像され得る事であらう。

社會主義者が新法案に反對することの滑稽なのは言ふ迄もない。新人諸君がムキになつて反對してゐる事も、此邊の事情を考へて見れば結局盜人に繩であり、野暮の骨頂である。諸君はこの法案と闘ふ前に、先づ社會主義者の墮落と闘ふ必要がなかつたか。結果を避ける前に、先づ原因を防ぐ必要がなかつたか。諸君が新法案に依つて失ふ多少の不自由に對して憤慨するのは誠に尤もであるが、然しその責任が果して政府のみにあるのか何うか。

新取締法案の價値を評價せんとするには、先づこれに依つて生ずる犠牲とこれに依つて防止される弊害とを秤つて見なければならない。勿論斯かる法案が確定する結果、幾多の犠牲を生むことになる。然し乍ら、これに依つて防止される弊害が、それ以上に大なるものである限り、吾々は甘んじて是に服する外はない。盛んなる新法案反對運動に冷笑を與へるの外なしと云ふのは、卽ち此理由からである。

閑人の遊戯

有島武郎氏が全財産五十萬圓を放棄して、一プロレタリアになるさうである。新聞の報導する處に依ると、農民を搾取した金によつて生活する事は、氏にとつて十年來の惱みだつたのださうで今度愈々長い間の懸案を實行するのだと云ふ。北海道の農地は小作人達にやつて了ひ、株券その他の財産は母親の生活費に宛て

たり、兄弟に分けたりし、自分は借家住居をして、これからは自ら稼ぐ原稿料だけで生活する豫定だとか云ふ話だが、これですつかりプロレタリアになつた氣になれるのなら、羨しい程單純な氣持である。

斯う云ふ事を言ひ出して、土地を放棄した人には、嘗てトルストイと云ふ仙人があつた。これで氣が濟むとか濟まないとか云ふ事は、御當人の主觀だけの問題だから何うでもいゝだらうが、然しこれで一つぱしプロレタリアの氣持が判るやうな顔でもされては、嘸プロレタリアの方が迷惑な事だらうと思はれる。母親の爲めにも、兄弟の爲めにも夫々莫大な資產を殘して置いて、自分だけが原稿で（而も日本に於いて有數の高價な）生活することが、どうして其日の生活に追はれ、職業の不安に絶えず脅かされてゐるプロレタリアと同じだと言へやう。

有島氏の得てゐる文壇的地位は、一生動かされることのない程安全確實なものであらう。從つてその原稿料は、この贅澤な生活を一生涯保證して尙餘りあるものである。これで何處に餘分な農地などの必要があらう。流行の言葉で言へばブルヂオアとしての生活を續けて行く爲めにも、北海道の農地とやらは氏の爲めに全く不要なものだ。氏はこの決心が精神的な條件の整ふ事によつてのみ爲された樣な口吻を洩らしてゐられるやうであるが、原稿料の安全と云ふ物質的條件は、果して其の考慮に入つてゐなかつたのであらうか。

近頃我國には妙な思想が入つて來た。それはプロレタリア乃至ブルヂオアと云ふ概念に宛て箝めることに依つて、人間の價値標準を定めやうと言ふ思想である。かう云ふ人々にとつてはプロレタリアであることが人間の最高資格なのである。然し乍ら嚴格なる意味のプロレタリアは、資本家によつて搾取されてゐる勞働者とその豫備軍とに限られる。お氣の毒な事乍ら、現在におけるプロレタリア崇拜者の大部分は。何れも文筆業者であつて、勞働者ではない。

何人もが勞働者となり得る條件を持つ者でない以上、プロレタリアとなる事の

出來ぬのは決して恥辱でも何でもない。それを強ひて、プロレタリアであると考へやうとする傾向ほど馬鹿らしいものはないのである。

有島氏の今度の決心には斯かる風潮が影響してゐたのではなからうか。若しさうだとすれば、人間の價値標準はプロレタリアであると無いとに依るのではなくさう云ふお目出度さを持合せてゐるかゐないかにある事を主張したい。然し單に氣分の上の悦びを得る事が目的だとすれば、トルストイまがひの人道主義で、眞劍な人生を遊戯の舞臺とする事の出來る閑人の境地を羨むの外はない。

泣く子と地頭

劇作家協會が例の改作事件の紛叫の爲め、到頭帝劇と絶縁することゝなつて了つた。今後は持久的に帝劇と對抗しつゝ、劇界革新の爲めに盡すのだと云ふ。

事の起りは、山本有三氏作の『女親』が帝劇に上演されてゐる時、帝劇の大株主であり且つ社長である大倉喜八郎が、同郷人たる新潟縣人會員を帝劇に招待したことに始る。其際『女親』には風敎上宜しくない處があるとあつて喜八郎が勝手に筋を直し、作者に一應の斷りもなく上演させたのが、作家側の憤怒を買つた原因である。作家の團體たる劇作家協會は、大倉と帝劇とで連名の謝罪廣告を新聞に出せ、出さなければ今後一切脚本を提供しないと申送つたのであるが、帝劇ではテンデ相手にしない。其處で愈々絶縁、對抗と云ふ現狀に到達した譯である。

成程、喜八郎づれに改作されたのでは、作家側もおとなしく引込んでは居られまい。帝劇が惡いか、作家側が惡いかなどと云ふ事は云ふ丈け野暮の話である。彼等が抗議を申込んだのには全く當然の理由がある。

然し乍ら、世の中には『長い物には捲かれろ』『泣く子と地頭には勝てない』と言

ふ言葉もある。如何に我儘專横でも相手が泣く子や地頭であつて見れば、楯をつく丈け非道い目に逢はねばならぬのである。さう云ふ場合には只長いものに捲かれてゐる外はない。

劇作家協會の今度の行動には惜しい事だが、此邊に對する省察が缺けてゐた。如何に藝術が神聖であらうとも、資本家に對しては只捲かれてゐる外はないのである。喜八郎のした事が我儘であらうとも、帝劇の態度が專横であらうとも、要するに泣く子や地頭のする事ではないか。それに楯を突いて一體何うなると云ふ譯だらう。

脚本を提供しない等と言つた處で、劇界の資本家がビクともするものでない。それは、勞働者が勞働力を提供しないなどと啖呵を切つた處で、誰も驚かないのと同じである。彼等は必要な物は何處からでも買つて來る。現に帝劇と劇作家協會とが絶縁する際には、帝劇に關係の深い數人の作家が、協會を脱退して帝劇に走つてゐる。今後だつて金のあるに任せて、今は威勢のいゝ文句を並べてゐる協會員の中から、一人抜き二人抜き、必要さへあれば全部でも引抜いて了ふことであらう。

泣く子と地頭の我儘は今始た事ではない。資本家の横暴とやらは劇界に丈け限つた事ではない。それに楯を突かうと云ふ事は、生半端な了見で出來る筈のないものである。それを、どうせ高い原稿料さへ拂へば何處へでも轉ぶ人達が、脚本を提供しない等と云ふ啖呵で、天晴れ反逆者振るのは飛んだ間違ひである。躍氣になつてゐる人々には、甚だお氣の毒の次第ではあるが、藪蛇に終りさうな反逆の失敗も亦當然の結果であると云ふの外はない。

勞働階級の名

上陸禁止命令を出したり、警保局長が威勢のいゝ啖呵を切つたりした、問題の産兒制限論者サンガー夫人も愈々來朝した。

理屈の上から考へれば、産兒の制限は勿論現在の資本主義と合致する事の出來ぬものである。政府が周章狼狽するのも、警保局長が怒るのも全く無理のない話で、實際夫人の主張が普及しては、資本主義の發展もバッタリ止らねばならぬ事になる。さうなつては政府や資本家が困る計りではない。勞働階級自身もやがて避姙によつて救はれる當面の苦痛以上の間接の苦痛を負擔しなければならないことになる。卽ち資本主義社會が無限に續くからである。

處が安心な事には、サンガー夫人の理屈などと言ふものは、決して勞働階級に普及する見込のないものである。それは丁度世帶の會の活動や、國立榮養研究所の研究が、慌しく且つ不安な勞働階級の生活に何の交渉も無いやうに。

然しサンガー夫人やそのお弟子さん達は、しきりに勞働者の爲めにと云ふ事を叫んでゐられる。一寸聞くと如何にも勞働階級の實用に適しさうな話しだが、巡査を材料に榮養の研究を計り、安價食物の調理法を發表しようと云ふ榮養研究所の仕事と同樣、それは結局有閑階級の飯事にしか役立たないのである。日備勞働者の女房が、外に用のない奧樣と伍して、榮養研究所へ日參する譯にも行くまいし、避姙法の研究に浮身をやつしてゐる譯にも行くまい。

して見ればサンガー夫人の來朝は、政府にとつても勞働階級にとつても、何等の脅威となるものでないが、不思議なのは金もあり暇もある人々が、滔々として勞働階級の爲めと稱する運動を始めて來る社會的傾向である。世帶の會、榮養研究所、産兒制限運動、文壇プロレタリア運動等の全部が、勞働階級とは全く緣の

無い人々によつて行はれてゐると云ふ現象である。

これ等の運動には固より夫々異つた處の個別的原因もあらう。然し其全部に共通してゐる原因は、有閑階級が安閑として徒食してゐる事に對する、若しくは勞働階級とは隔絶した優越な生活を營んでゐる事に對する良心の苛責にあるのではなからうか。勞働階級の爲めに、何等かの貢獻をしようとしてゐると云ふ、溫情主義的安心を求めんが爲めではなからうか。

果してさうだとすれば、勞働階級こそ善い面の皮である。吾人は近時流行するやうなプロレタリア崇拜狂ではないが、有閑階級の氣休め的遊戯を濫用す可く、勞働階級の名は餘りに神聖過ぎる事を思はずにはゐられない。

平和の一面

平和博覽會が開かれた。

その中の教育社會館で一番人氣があるのは、協調會出品の工場委員會制度の模型だとの事である。何でも勞働者代表と資本家側の代表とが卓を圍んで勞資協調の會議をしてゐる模樣を、亞鉛板の人形でズラリと並べ、この制度を實行した工場の能率を增進して、勞働者は休日に家族を打つれて日比谷公園を散歩する樣になると云ふ順序に、模型が出來てゐるのださうな。

これで何百萬と云ふ資金を擁してゐる協調會の存在が、少し明かになつたので聊かホッとする。而もこのお目出度い模型が人氣を呼んでゐると聞いては產業奬勵の平和博覽會なるものと、本當の平和とが氷炭相容れないものであらうなどと云ふ雜念妄想を離れて、心から平和を祝福したい氣になる。

自由の犧牲

一旦は亭主を足蹴にして天晴れ女振りを擧げた白蓮女史も、世の中のことは御自分の頭の中ほど自由に行かず、情人龍介君とやらとの同棲も束の間で柳原家に幽閉の身となつた。そして本當に前非を悔悟したのか何うか知らないが、今迄の不埒を詫びた書狀を出した上、綠の黑髮を切り落し、近く尼となつて京都へ行く事になつたさうである。折角天下の女の爲めに自由への道を示したと思つたら、忽ちこの悲慘な末路に陷つたのだから御當人の爲めには甚だ御氣の毒な次第である。然しこれと云ふのも、頭の中だけで考へてゐればいゝ事を、實際の世の中でやつて見ようとした事が、既に大なる誤りであつたからである。今頃はさぞ人生の無常を嘆じてゐるだらうが、無常なればこそ人生なのだ。

不自由な人生で、一切の事情を無視して、自由な戀に陶醉しようと云ふのは、柳原伯の言草ではないが『天才か狂人』かで無ければ出來ぬことである。然しこの天才だか狂人だかの自由な行爲の爲めに、飛んだ不自由な目に逢つた人達のことを思へば、尼になつた丈けで罪の償ひが出來るものか何うか。

觀念の世界では何人も同樣に自由を持つ。然しこの不自由な世の中では、何等かの犧牲なしに自由を得ることは出來ないのである。即ち何人かゞ自由を得ると云ふ事は、必ず他の何人かゞ自由を失ふ事になるのである。然るにこの觀念世界の自由を、直ちに無常な現世へ移さうとする人がある。それは天才か狂人かの白蓮女史計りではない。蓮葉な女學生の中にもあれば、髭の生へた堂々たる思想家の中にもある。この人達の理解力では、觀念の世界と現實の世界との間に横はる境界を知る事が出來ぬのであらうが、その自由の試みは多くの場合白蓮流の破綻を生ずる事になる。然もその爲めに周圍の者は思ひ掛けぬ犧牲に供せられるので

ある。

慎しむ可きは自由の道である。白蓮女史の自由の結果を見て、今更らながらこの感を深うせずにゐられない。何等の犧牲なしに自由が得られる樂園が來ない以上、利己的な自由主義者は常に吾人の持つ自由の敵である。

近代人の苦悶

議會に於ける昇格案を中心として、學生が運動に狂奔した有樣ほど滑稽なものはない。『昇格か、然らずんば廢校か』と云ふ『悲痛なる叫び』は幾度か繰り返されてゐたのである。若い學生だけかと思つてゐたところが、何づれ妻子もある可き敎師連までが一緒になつて悲壯な叫びを擧げてゐたのであつた。

而も遂に昇格案は握り潰された。幾度びかの叫びの手前、高等師範や高等工業が廢校になつて了ふことだと思つたところが、既に廢校の覺悟をしてゐた筈の人々が『善後策を校長に一任する』とか云ひ出した。其後遂に一ヶ月近くなるが、吾々は廢校の報を耳にしない。そして意外にも卒業式も無事に擧げ、最も運動に狂熱してゐた筈の高師生が、それ〴〵郷里に歸つたり、任地に赴いたりしたと云ふ事を聞いたのである。

大の男が一再ならず決心したと云ふからには、そして一旦口外し世間に誓つたからには、否が應でも廢校して貰ひ度い。龍頭蛇尾もあまりに甚だしいと言はねばならぬ。彼等の流した涙は一體何の爲めであらうか。幸にして昇格案が通らなかつたからいゝ樣なものゝ若し貴族院が彼等の涙を買つて通過させたら、彼等はまるでペテン師だと言はれても仕方があるまい。これで何の面下げて文相の二枚舌や政府の不得要領が責められるのだ！

而も龍頭蛇尾に終る時の文句は何うかと云ふに『卒業生の任地も極まつてゐる事だし』とか『來年もある事だから』とか云ふのであつた。そんな事は初めからきまつてゐた。今更ら餘計なことである。來年もあり、卒業生の任地も極つてゐるけれども、兎に角今年通過しなければ廢校すると云ふ意氣込ではなかつたのであらうか。世には、睪丸の所在が疑しい人が多いものである。

吾々は『昇格か廢校か』の叫びより龍頭蛇尾に終るまでの、彼等の心中に二個の相背離した心理が働らいてゐたことを感ぜずにはゐられない。一は卽ち男は氣で持つ底の感情であり、他は卽ち實利的、功利的素町人根性である。男は氣で持つ情熱は、吾々が古くから有してゐるものであり、素町人根性は近世に於ける資本主義と共に發達して來たものである。花より團子である。資本主義社會に於いては、總てが益々功利的實利的になつて行く。かゝる社會に生存して行く爲めには、何人も大なり小なり、氣で持つ情熱を犧牲にしなければならないのである。

今日の社會に於いて、意地よりも張りよりも實際上の利益に走るものゝ多いのは、全くその爲である。高師の敎師學生にして見ても、意地と張りで廢校したのでは、生きる爲めに甚だしい困難を感ずることになる。然し彼等の心中には常にこの二樣の精神が相鬪つてゐるのである。時によつては意地の方が强く働くこともあり、從つて昇格か廢校かと云ふ氣にもなれるが、いざとなると素町人根性の方が强くなつて龍頭蛇尾に終るのである。

斯くの如く考へて來ると、龍頭蛇尾に終つたことよりも、何故最初から素町人の方で、一貫しなかつたのだと責めたくなる。どうせ今の世の中では素町人根性でなければならないのだ。そんならば、生なか意地や張りがあるやうな顏をしないで通した方が利口である。然し一度び意地と張りで立つたからには飽く迄意地で通さねばならない。途中で實利主義に鞍更へするなどとは、以つての外だと云はねばならぬ。かくては、彼等の情熱が實利主義の一手段だつたと罵られても仕

方がないのである。畢丸の所在を疑ひたくなるのは實に此處である。

し　人種平等の樂園

日本では人種平等論が盛である。人種の差別を撤廢せよとか、人種待遇を平等にせよとか云ふ叫びは、日本人が常に口にするところである。そしてかゝる平等無差別の人種觀の上から、加州に於ける排日運動が甚しい無道であると罵られ、加州米人の態度が非人道的であると叫ばれてゐるのである。

これ等の人種平等論を聞いてゐると、日本こそは有色人種の樂園であり、劣等人種にとつて絶好の避難所であるかのやうに感じられる。ところが、平等論全盛の日本は必ずしも有色人種の樂園でない。日本人の人種平等論は、白色人種と日本人種とのみに適用さる可きものであると見えて、避難所のごとく感じられる此の日本に於いても、より劣等なる人種は常に迫害されてゐるのである。

近來に至つて、支那勞働者の日本に渡るものが甚だ多くなつて來た。東京に於いても、既に百七十名以上の支那勞働者が在住して居り、今後益々增加す可き傾向がある。これに對して日本は如何なる待遇をしてゐることであるかと云ふに、それは加州に於いて邦人勞働者が受けつゝある待遇と聊かも異るところがないのである。

卽ち日本政府は明治三十二年の外國勞働者入國に關する勅令に基いて、これ等の支那人を退去せしめるに努めてゐるさうである。その實際の理由は、彼等が『何づれも極めて低廉な生活費で衣食し、從つて賃金も安く內地勞働者の失業問題に惱んでゐる際、兩者の間に種々紛擾を來す虞れがある』からだと云ふ。これは加州に於いて邦人が排斥される理由と、聊でも異るものであらうか。三月末に

來朝した米國の排日論者テーローは新聞記者に對し『在米の日本人は餘りに勉强で生活程度が無秩序に安價なので』、自國國民保護の爲めに餘儀なく排斥するのだと語つてゐる。

文化の程度が劣つてゐる國民は、必ず生活程度が低いものである。從つてその賃銀も低廉でいゝ事となるのである。米國人よりは日本人の賃銀が安く、日本人より支那人の賃銀が安いのは、極めて自然的な事實である。そしてすべての企業家が、能ふ限り賃銀の低廉な勞働者を得ようとしてゐる今日、米國に於いて日本勞働者が米人勞働者の脅威となり、日本に於いて支那勞働者が邦人勞働者の脅威となるに不思議はない。

して見れば、米國に於いて日本勞働者が排斥されるのは、避く可からざる事である。嚴乎たる經濟的理由は、生なかな平等論や人道主義で覆し得るものではない。然るに日本人は、愚にも付かない人種平等論で、この經濟的事情に反抗しようとしてゐるのだ。そこで、日本こそは劣等人種の樂園であるかに見えて來る。支那人排斥は一體何うしたものだ、と云ふ揚げ足もとられることになるのだ。

人種による差別待遇は、是非善惡の外である。止むを得ない事實である。米國の排斥が非人道であるならば日本の支那人排斥も非人道である。日本が正當ならば、米國も亦正當なのである。人種平等論の眞諦がより文化的なる人種に差別の撤廢を求むることにない以上、日本の平等論者が今後米國の不平等を責むることは、斷じて許されざる不合理である。人種平等の樂園は今日に於いて結局夢想である。人種平等論の盛んなる日本に於いてすら、許されなかつた樂園が一體何處に許されるのであらう。

平和博の意義

花の上野には今博覽會が開かれ、萬國街だとか南洋館だとか云ふ餘興で田舍者

を集めてゐる。當局者の話すところによると、豫期してゐた程の入場者は得られないと云ふ事であるが、それでも警察が手古摺つてゐる程犯罪の多い事から見ても、相當の人出はあるらしい。

博覽會の内外では、男蕩し女蕩しの不良男女を初めとして、掏摸とかチーハー師とか云ふ犯罪者が、腕を鳴らして跳梁してゐる。新聞に報じられるところを見てゐると、女看守に化け込んで一と仕事しようと云ふ女や、酩酒屋あたりと連絡をとつて少女誘拐を目論む不良少年があつて、『刑事等も人手が少いので著しいもののみを檢舉してゐるが』、而も一日十數名近い檢舉がある有樣ださうである。

博覽會などを開いたところで、産業開發の爲には何の役にも立つものでない。博覽會などの力に依らなくとも、産業は行き詰るところまで發達し切つてゐるのである。そして社會は、此の發達した産業の爲めに、爛熟した資本主義の爲めに全く支配されてゐる。物産陳列所や勸工場で産業開發を計る必要があつたのは一と昔前のことであつた。

この時勢遲れの博覽會にも、田舍者を吸收して散財させる外に、今一つ奇妙な意義がある。それは産業の極端な發達により頽廢的世紀末的の氣分に包まれてゐる今日の社會に於て、當然避け能はざる色情的犯罪者をして新なる活躍の舞臺を得せしめたと云ふ事である。

今日の社會に於いては、すべてのものが生活の武器に供される。社會が益々頽廢的になつて行く以上、美貌と巧言令色を武器とするものが增加し來たるは避け難い現象であらう。彼等が武器を弄する舞臺は至るところに設けられてゐたが、然しエロテイツクな南洋踊で客足を呼んで呉れる博覽會ほど卑俗で便利なところはない筈である。

故に他の何人よりも斯かる犯罪の常習者にとつて、博覽會が有意義であると云ふは決して差支ない筈である。況して斯かる傾向が産業開發の蒔いた種である限

り、博覽會が今、產業の開發と云ふ目的から、蒔いた種の刈り入れに移つたと見ることも差支あるまい。今年は不良男女の當り年である。

脫稅と社會奉仕

名古屋の女富豪坂種子は永年莫大の脫稅をしてゐた事が發覺し、一萬數千圓の罰金と三萬幾千圓の追徵金を徵收されることになつた。新聞の傳へるところに依ると、彼女は『全財產千三百萬圓を社會奉仕の爲めに投げ出し、之を財團法人として大に善根を施さう』としてゐたのださうである。

不幸にしてその財團法人の事業が何であるかは知ることが出來なかつたが、恐らく彼女が經營する殖產會社とかを財團法人にするのではなからうか。新聞記事の口吻によると、財團法人の社會奉仕と脫稅とが氷炭相容れないものか何かのやうであるが、然し脫稅で罰金をとられる位の女であるからこそ、斯う云ふ社會奉仕も考へるのである。

脫稅と言へば所得の申告をゴマ化すことだと思ふなどは、血の巡りの惡い人にのみ限られてゐる。近頃の富豪はいろ〳〵の名案を考へてゐるのである。社會奉仕などと云ふ事からが、眉唾ものと思へば差支ない今日、財產を財團法人にするなどと云ふことは、脫稅手段のうち比較的通俗なものである。

この女長者も今少し巧妙な脫稅をやつて居れば、天晴れ善根計り施してゐる事になるのに、申告をゴマ化したり高々財團法人位の智惠しか出ない者だから、すつかりボロを出して了つたのである。之も女賢うして牛賣り損ねた類であらう。

未成年者

未成年者禁酒法案が通過した。そして四月から實施されることゝなり、花見で浮かれてゐる未成年者や、雇主の振舞酒を呑んでゐる未成年者が、ドシ〳〵告發されてゐる。

花の上野で禁酒同盟會と日本勞働總同盟とが、酒を止めよ止めるなの宣傳競爭をしたとか云ふ今日此頃、禁酒が勞働階級にとつて迷惑千萬なことは、今更ららしく言ふまでもない。

然し驚かされるのは、カゴの生えた此法案が、今時分通過したと云ふことである。甘年前ならば、未成年者は丁稚小僧の類を除いて、多く親がかりでゐられたのである。從つてこれ等の未成年者に禁酒を勵行せしめると云ふ事は、比較的容易でもあり、多少の理屈もあつた。

根モ正翁の未成年者禁酒法案が現はれてから今年で廿三年になるさうである。その間にも時勢は變化してゐる。今日の勞働階級の子弟は、成年に達する頃まで安閑として部屋住みになつてはゐられない。彼等が一本立ちとなる時間は次第に短縮されて來たのである。工場に事務所に一人前の勞働をしてゐる未成年者は、甚だ多數に上つてゐる。

一人前の勞働者になつてゐるからには、一人前の慰めも要るであらう。生産も消費も一切が自由である筈の今日、獨立の勞働者に消費の制限を强制するのは、少々遠慮して貰ひ度い。『教化の爲め』にしては未成年者も大人になり過ぎてゐる。少年の中に禁酒の風習を養ふ爲めだとあらば、未成年者の意義を時勢相當に變更して頂き度いやうである。

時代の犧牲

東京の雜誌小賣業者は近來著しく盛になつて來た雜誌回讀會を商賣敵として非常に迫害してゐるやうである。初めは回讀會も雜誌販賣組合の會員であつたものを、二三年前よりこれを除名し、更に彼等には雜誌の卸賣を爲さざる事としたが組合員の中で規定に背いて雜誌の提供をするものがあつたとて、一と紛擾起し結局卸賣ならずとも、同種の雜誌二冊以上を販賣することを嚴禁するに至つた。

雜誌購買の途を絶たれては、回讀會の仕事も上つたりである。そこで回讀會側と組合側とはそれ〴〵辯護士を賴んで裁判沙汰まで起してゐると云ふことである。

雜誌の回讀は讀者側にとつて、相當に便利なものである。今日のごとく雜誌の種類が殖え、定價が高くなつて來ては、この低廉にして多數の雜誌を讀み得る機關が益々發達するのは當然の勢ひである。小賣業者にとつて打擊であればとて、自然の勢ひを阻むことは結局不可能であらう。新らしい機關が表はれるごとに、古いものが犧牲にされることは避け難い所である。

小賣業者があらゆる手段を巡らして、回讀會を迫害せんとしてゐることは、自然の勢ひを阻むものであり、社會進化の傾向に反抗せんとするもので、恰も產業革命による機械工業の出現に對して、手工業者の群れが反抗の擧に出でたのと同一轍である。小賣業者の立場が、如何に苦しからうとも、社會進化の犧牲である以上甘んじて從ふの外はない。それは如何に反抗しても結局徒勞に終るの外はないからである。

財産と運命

朝日平吾の手にかゝつて非業の死を遂げた安田善次郎の伜は、今度家督を相續し、且つ善次郎の名を繼ぐことになつたので、本所の本邸で園遊會を開いたさうである。ところが、その園遊會に於いて來客が歡を盡してゐる間も、彼れは奥の方で縮んでゐたと云ふことが報じられてゐる。

如何に先代善次郎が刺し殺されたからと言つて、二代目善次郎も同樣の最後を遂げねばならぬと定つてゐる譯ではない。まして襲名早々から、さうさう覗ふものもなからうではないか。人と接觸する度びに一々心配してゐたのでは、氣苦勞の方で長生きが出來ないであらう。

襲名必ずしも運命を襲ふことではない。然しそんなに自分の運命が怪しまれる位なら、先代が人の恨みを買ひ乍ら造つた財産など繼がぬ方が安全だつたのである。先代の遺業を繼承するだけの度胸があるなら、自分の運命に對しても今少し大膽であつて欲しいものである。

幻滅者の社會觀　終

第四篇　鬼ころし

大正十一年六月十日印刷
大正十一年六月二十日發行

定價二円三十錢

著者　高畠素之

東京市京橋區桶町十五番地
發行者　株式會社大鐙閣
代表者　面家莊佶

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷者　新井由藏

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　電新堂

幻滅者の社會觀

定價貳圓參拾錢

發行所

東京京橋桶町
大阪三休橋南

株式會社　大鐙閣

高畠素之著並譯書

◈社會主義と進化論　定價貳圓參拾錢

◈リウイス原著 社會主義社會學　定價貳圓參拾錢

◈カウツキー著 マルクス資本論解說　定價參圓貳拾錢

◈ラフアルグ著 財産進化論　定價貳圓貳拾錢

◈社會主義的諸研究　定價貳圓五拾錢

◈マルクス學研究　定價貳圓

送料各拾貳錢

東京・大鐙閣・大阪

502
109

終